

## プラグマティズムとは何か

K A Z U

国分先生が語るキーワードに「折衷主義」がある。「役に立つもの、使えるものは何でも使え」という折衷主義の考え方を支える背景にプラグマティズムがある。

### 1. プラグマティズムの誕生

・1870年代、マサチューセッツ州、ケンブリッジ(チャールズ川をはさんで、ボストンの対岸にある町。アメリカ最古のハーバード大学の所在地)に一つの哲学研究グループがあった。このグループは、ハーバードの若い卒業生、大学教授、弁護士、哲学者、化学者、心理学者からなり、哲学の諸問題について話し合い、「形而上学クラブ」と呼ばれた。このグループには、後の心理学の大家、ウィリアム=ジェームズがいた。

・当時は、チャールズ=ダーウィンが「種の起源」(1859)において理論的に体系化した進化論と、キリスト教の教理とが両立するかどうかという問題がグループにとっての共通課題であった。

・この問題に対するグループの見解は、「キリスト教の神の存在は否定しないが、宗教は宗教、科学は科学として、おのおのの領分をはっきり分け、日常生活を可能にする様々な信念は、科学によって明らかにされる真理にもとづくべきである」とした。

・この共通の哲学上の立場を、メンバーの一人、チャールズ=サンダーズ=パースが「プラグマティズム」と命名した。「プラグマ」とは、行動とか行為を意味するギリシャ語である。要するに、実験とか実践、つまり広い意味での行動を人生の中心におき、真理も信念も習慣も全て、行動を通して形成され、修正され、破棄される、という考え方である。

・1620年にメイフラワー号に乗ってアメリカにやってきた清教徒。東部十三州の団結により独立を勝ち得(1775-1783,独立戦争)、果てしない西部を開拓した彼らの信条には、「はじめに行動ありき」という言葉が刻まれている。

・プラグマティズムは、「観念論」に対比する「経験論」の代表的なものであり、「問題を解くために、役に立つ知識こそ、真の知識である」と考える。プラグマティズムは、アメリカという風土におけるアメリカ独自の経験が理論として結実したものであるといえる。

・プラグマティズムが誕生した頃、ジョン=デューイ(1859-1952)は、まだ小学生であった。

## 2. ジョン＝デューイの生涯(主なトピック)

- ・ 25歳，ミシガン大学哲学科講師。
- ・ 26歳，ミシガン大学助教授。
- ・ 29歳，ミシガン大学哲学主任教授。
- ・ 34歳，シカゴ大学哲学・心理学・教育学主任教授。
- ・ 36歳，シカゴ大学附属実験学校（デューイ学校）設置。

教育を本当のものにするには，子どもの学習活動の発展の過程を心理学的に明らかにすること，そして，人間が協同して働くことを通じてできる仲間づくりが人間的成長には欠かせないものであることを確信したデューイは，その二つを結びつけてみる実験のできる学校を設置した。それが，実験学校である。後に，アメリカ一般に行われるようになった進歩主義の教育運動は，この実験学校の試みに集まった人々によって始められたといつてよい。

- ・ 39歳，「学校と社会」執筆。

シカゴの実験学校の成果をまとめたものである。「経験によって学ぶ、なすことによって学ぶ」は，キーワード。

- ・ 44歳，コロンビア大学哲学教授。
- ・ 56歳，「民主主義と教育」執筆。
- ・ 59歳，日本，中国訪問。\*日本では，新渡戸稲造の家に2ヶ月滞在。デューイが来日した1919年は，第一次大戦の勝利によって，日本の自由主義運動も相当強い高まりをみせていた時期。大正デモクラシー目前の日本に，デューイは，社会そのものの改造の方向を示した。
- ・ 70歳，コロンビア大学退職。名誉教授。
- ・ 77歳，トロツキーをメキシコにて査問。
- ・ 92歳，死去

## 3. ジョン＝デューイの教育理論

### (1)実験学校

・ 物理学や生物学に実験室があるように，心理，道徳，芸術など様々な人間の精神の発達について研究する哲学，心理学，教育学教室にも，ひとつの実験室があつてしかるべきである。

・ 上記の信念を具現化したものが「実験学校（デューイ学校）」である。はじめは一軒の家を借りて開校し，生徒16人，教師2人でスタートした。

- ・ 3年間の実践を報告した教育講演をまとめたものが，「学校と社会」である。

## (2) 哲学思想

・「民主主義と教育」の中では、次のように考えをまとめている。「一般的に、人間を含めて、生命をもつ有機体が生きていくということは、その有機体が、自分を取り巻く環境に対して働きかける行動によって、自分をつねにあらたにつくりかえていく過程のことをさしているのである。ところが、人間の場合では、自分をつくりかえるということは、肉体を更新していくことであると同時に、それは信仰や理想や希望や幸福や悲しみ、そのほかの風俗習慣の更新をも含んでいる。つまり、人間は社会的な様々の経験を更新することによって、その経験をじつは持続させていくのである。すなわち、新しい酒は新しい革袋に入れながら、酒が人生に対してもっている意味そのものは、これを持続させていく。このとき、教育とはもっとひろい意味において、人間の生命を社会的に持続させていく手段なのである。それは、人間社会が自己を存続させるために、自己の経験を次の世代に伝達するための、社会自身のもつ機能にほかならない」

## (3) 学校教育における問題

・人間が秩序を維持し、勤勉に働き、自分の責任をわきまえ、義務を果たすということについて考えるようになるのも、社会的生産活動に参加して働くことによって可能となる。ものの用にたちうべき人間は、生産活動を通して育てられ、鍛えられる。古き良き時代は、それが古いからよかったのではなく、生産に伴う健全な倫理があったからよかったのである。

・昔は、人間の生活が自然に直結していたから、人間は直接自然に抱かれ、自然を操作し、自然を征服しなければならなかった。このような自然との交渉を通じて、ただしくものを見る態度、創意工夫、想像力、論理的な思考力、純粋な感受性などが養われることができたのである。

・昔は、かりに学校がなくとも、社会はひとりでに、その子弟に全人間的教育を施してきた。だから、学校は、読み・書き・そろばんの教育をやっているだけでよかった。ところが、今では、社会は、ばらばらになったかたわの人間しかつくりだすことができない状態にある。学校は、読み・書き・そろばんだけでは、もはや十分にその使命を果たすことができない。かつて、社会自身が行っていた全人間的教育を、いまや、学校が社会にかわって行わなければならない時期が来た。学校が社会の変化に対して敏感でなければならないというのは、この意味においてなのである。

・今日の学校は、社会の進歩がもたらした人間性の成長の面を十分に生かしながら、昔の社会がもっていた自然や生産活動との直結状態に起因する人間の美しい面を失わないようにするにはどうしたらよいか、ということを実際に考えねばならない。

## (4) 社会のひな型としての学校

・学校教育の問題を解決するためには、授業の中に、木工、金工、編み物、裁縫、料理など技術・家庭に関するものを取り入れることである。これらは、ただ子どもたちの自発的興味や注意力を高めたり、大人になってからの実際生活に役に立つようにすることだけを

目的にするのではない。これらの時間に子どもたちが学校で行う作業は、いずれも一つの社会的意義を持っているのである。これらの作業は、従来の社会が常に新しく生まれ変わり、存続していく上でもっとも必要なものであり、これを通して子どもたちに社会生活で一番大切なものが何であるかが教えられてきたものである。

・これらの作業を課業に取り入れるのは、これらが人間社会に持っている本質的な意義を現代において生かすためなのである。現代社会が失いかけている基本的な人間関係を学校という場で再構成しよう、というのがそのねらいである。学校は社会から隔離された温室ではなく、あるべき社会生活の純粋なひな型とならなければならない。

・子どもたちは作業を通して、社会的・道徳的に、協力、責任、義務などのモラルを身につけるばかりでなく、その作業をうまく運ぶために、その作業の目的と方法について熟慮し、もちいる材料についての理解を深めるための研究を行うようになる。すなわち、地理、歴史、理科、数学などの基本的知識なしには、作業がうまくやれないことがわかり、それらの知識を自分から興味をもって獲得するようにし向けられるのである。これがいわゆる、「問題解決学習」の原型である。

< 参考資料～インターネット上から検索・引用 >

#### 1. プラグマティズム

「pragmatism 実用主義ともいわれる。プラグマはギリシア語の pragma = なされた事柄または行動 を意味する。それは、19世紀末から20世紀はじめにかけて、従来の形而上学的・思弁的哲学に反対してアメリカに形成され、これと共通した主張は、時をおなじくしてヨーロッパにもあらわれた。アメリカでのその創説者はパーズであり、ついでジェームズによって普及され、さらにデューイが新解釈をあたえてきた。イギリスではF.C.S.シラーがそれを代表している。かれらの主張にはそれぞれ多少のちがいがあるが、共通点とみられるのは、まず第一に真理を実践上の有効さできめること（パーズ）であり、実践的結果とくらべて理論の真偽の判定をする哲学的論議の解決法とし、真理とは、われわれをみちびく仕方で、もっともよい働きをするものであり、生活のどの部分にも、もっともよく適応するものことだ、などといわれる（ジェームズ）。また観念を行為の道具とみたり（デューイ）、認識とは主観的真理の総和だとしたり（シラー）する。この場合に、さかんに説かれる実践と真理との関係では、実践上の有効さが客観的真理を検証するというのではなくて、個々人の主観的利益に役だつという見方である。このような主観的観念論は、プラグマティストの共通にもっているものである。この立場では、真実とは<経験>と同一のものであり、これが<純粹経験>の名で説かれる。認識における主観と客観とは、この経験の内部での対立にすぎないのである。論理学の法則と形式とは、それによれば、有用な擬制（fiction）であって、なんら客観的なものではないと説明する。倫理・社会にかんする見方では社会改良論（meliorism）にたつが、また、立ちまされた個人の尊重に力を入れたり（ジェームズ）ブルジョア民主主義の弁護を強調したり、さらには人種主義・ファシズムを公然と擁護したり（シラー）している。現在ではシドニー・フック（Sidney Hook, 1902～）のよ

うな反マルクス主義・反共産主義のチャンピオンもでている。プラグマティズムは、アメリカで20世紀はじめくらい、精神生活を支配してきた有力な哲学であったが、いまでは新実証主義や意味論や操作主義などにむすびつけられて、これらに席をゆずったかたちになっている。わが国では、戦後、アメリカの支配のつづくなかで、プラグマティズムおよび、これにつながる現代思想が、学説のうえでも、実生活のなかにも、つよい影響をあたえている。」(哲学辞典 森 宏一編集 青木書店 より)

## 2. 問題解決学習

・デューイの学習理論を基礎として開発された。児童・生徒自ら直面する生活上の問題に取り組み、自発的に解決する過程で創造的・反省的思考を身につけていくことがねらい。

・今日、自ら学び、自ら考える力の育成が強調され、その指導法としては、問題解決学習、発見学習、構案法(実際の作業を中心とした問題解決法)、総合的学習などが重視されている。問題解決学習は、もともと日常生活の中で出あう具体的な問題を教材として、その問題を主体的能動的に解決する問題解決の過程を通して法則の理解や科学的思考の方法・能力の習得を図ろうとする指導法である。

・問題解決の過程は、古くはデューイ(1910)が、「問題に気づく」、「問題を明らかにする」、「仮説(解き方)を提案する」、「仮説の意味を推論する」、「仮説を検討する」の五段階に分析している。この順序は、今日でも認められ、言葉は違っても、大体同じ内容を含んでいる。

・問題解決学習は、デューイによって提唱された生活経験主義教育論の中核をなす学習原理。そこでは、学習は、子供たちが生活のなかで直面する具体的な問題にどう対処していくかという、問題解決行為そのものとしてとらえられる。したがって、それはおとなや教師が、生活の現実から遊離した教室のなかで、講義を中心にして一方的に子供たちに一定の観念的な知識を伝達していくといった伝統的な授業形態とはまったく異なる革新的なものであった。子供たちが、自分の興味や関心に応じてのびのびと作業や討議を行いながら問題を解決し、そのなかで自主的に生活に必要な知識や技能を習得していくという形で、実践的な生活主体の形成をめざすこの学習理論は、戦後の新しい民主教育のあり方を模索していたわが国の教育界に決定的な影響を与え、昭和20年代の「社会科」を中心とする活気と熱意にあふれた教育実践活動の根本原理となった。

## 3. 経験の再構成

・ジョン・デューイは、「現在の経験が過去の経験から生まれ、それが未来の経験へと流れていく」という経験の連続性と経験の再構成の教育原理を説いた。本当の経験は、本来的に未来に向かって開かれたものであり、また、自分だけが責任のもてる厳しい世界でもある。この意味で経験は高齢期における重要な学習の糧(学習の資源)となる。即ち、経験 学習 発達という流れが重要である。

・教育とは、経験の意味を増し、また後の経験の課程を導く能力を増加するところの経験の再構成また再構成である。('民主主義と教育')

・過去においていろいろな経験をもった児童・生徒が、かれらにとって新奇なある状況に当面したり、あるいは問題にぶつかったとき、環境に対して緊張した態度をとり、活動的な交渉を行う。児童・生徒は、自己の当面する環境を切り開くために、また問題を解決するために、いろいろな活動を行うようになる。すなわち、既往の知識・経験を生かし、さらに、他の知識を求めたりすることによって、環境に働きかけることになる。このような環境との相互の働きかけあいによって、他の知識は自分のものとなり、新たな経験が、自己の主体の中に再構成され、児童・生徒は成長発達していくとすることができる。したがって、教育課程は、このような経験の再構成を有効にさせるように、学習経験を組織することでなければならない。その意味で、教育課程の構成において問題となってくる経験は、単なる児童・生徒の既往の経験ではなく、児童・生徒の発達段階に即して、かれらの現在もっている経験を発展させ、それを豊かにするのに役だつようなものでなければならない。したがって、望ましい経験とは、無数の経験の中で、児童・生徒の発達を促し、教育の目標を達成するのに有効なもので、かれらの発達段階に即した、可能的なものをいうのである。

< 参考資料～國分先生講義「カウンセリングを支える哲学」から >

#### 1. 哲学とは何か

・我々の言動の前提のこと。

・多くの心理学者は前提をテストに置く。この世の中の中ものは量として存在するという考えるからである。

・人によっては前提を「無」とも言うし、「神」とも言う。しかし、例えば前提が「神」であると言っても論証のしようがない。皆の考える前提を論証できないということはすなわち、考え方が十人十色ということになる。それ故、誰の哲学があっているとか間違っているとか言えない。考えてみると頼りないが、この哲学がないとクライアントに対したとき、手も足も出なくなってしまうときがある。生きていく上で哲学がないと生きていけないということもある。

・病気のためにいくらも生きられない我が子に対して、好きなことをさせて我が儘放題に育てたらいいか、それとも、普通の子供と同じようにきちんとしつけをしながら育てたらいいか教えてほしいというクライアントがいた。その時に、ロジャーズ風の面接では何の助けにもならなかった。師である霜田静志に尋ねたところ、「これは心理学の問題ではない。君の人生哲学を語ればいい」と助言された。

・カウンセリングを行う人にとって、哲学は不可欠である。教師カウンセラーのように人の人生を左右するような立場にある人は哲学を持って。

・実存主義には量の思想はない。存在するのは一人一人の認知の世界である。いろいろな世界に自ら入って行ってつかんでいくしかない。文章としてはつかみ取ったものを書いていく。統計を重視する人々から見れば「エッセイ」と言われるが、この違いは哲学の違いである。

## 2. 何に対する「前提」なのか？

・「存在論」、「認識論」、「価値論」の三つがあり、三つの前提を総称して「哲学」という。

### (1) 存在論：この世に究極に存在しているのは何か？

・心理学：究極に存在しているものは量である。

・観念論(アイディアリズム)：プラトン、カント、ヘーゲルら。究極に存在しているものは永遠不滅のものである。神やイデーなど、目に見えないところにある。

・自然主義：フレーベル、ルソーら。この人生に究極に存在するのは宇宙の法則である。それらは地上にあり、子供の中にも宇宙が広がっている。子供にも太陽と水を与えれば伸びていく。「花園( Kindergarten)」の考え。ロジャーズは「すべての子供にはよくなる力がひそんでいる」と言う。

・プラグマティズム：デューイら。人生で究極の存在は「経験」である。経験とは五感で認識できる世界である。しかし、文化や時代によって経験は異なるので、永遠不滅のものではない。たえず変化するものである。ケースバイケースという考え方。

・実存主義：キルケゴール、ヤスパース、サルトルら。究極の存在とは一人一人の受け取り方の世界である。(現象学) 一人一人の認知、思いの世界である。

・論理実証主義：バートランドラッセルが初期。ウィットゲンシュタイン、エリスら。究極の存在は二つだけ、「論理と事実」である。「神は愛である」というのは事実ではない。人が勝手にそう思うだけである。だから、論議には値しない。フィーリングの世界はご自由にとということ。

### (2) 認識論

・観念論：直感的につかんだことを「知った」という。プラトンは、数学を解く力があるような抽象能力がないと難しいという。カウンセリングの世界では、観念論に立つ人はいないだろう。例えば、「離婚はよくない」という永遠不滅のものがあるのが観念論だから。

・「物事を知っている」とはどういうことか。自然主義では「宇宙の法則を知ることが物事を知ること。ゆえに、それらを学べ」という。プラグマティズムでは体験を集めてきて、データを整理し終えた瞬間、「知っている」という。実存主義では、体験的に「なるほど」と思ったら「知った」という。鈴木大拙の話の例。泥棒の父が、子供と一緒にある家に泥棒に入った。父親は「泥棒」と叫び、子供をおいて一目散に逃げた。子供は必死になって捕まらないように逃げた。禅の世界では、この泥棒の子供が体験したようなことを「真にわかった」という。「体を張って物事を知れ」ということ。これはエンカウンターグループに通じる。論理実証主義では、口とデータの両方で「知る」ということ。つまり、論理性と事実の発見で迫るということである。

### (3) 価値論

・「僕たちはどうすべきか？」という命題に対して。観念論では、「離婚はよくない」というように、答えは全て決まっていて、選択の余地はない。だからカウンセリングには使えない。自然主義では、「宇宙の法則によって生きよ」となる。プラグマティズムでは「ケー

スパイケース。目標達成に役に立つのが大切である。こうしよう、ああしようと考えた場合、どちらが役に立ちそうかを考えて判断せよ。そうすることが善である。」と考える。カウンセリングの折衷主義とはプラグマティズムの考え方を具現化したものである。例えば、高校生が「性的関係を持っていいでしょうか？」と相談に来た場合、「こういうデータがあって、損をする場合が多いよ」というようなデータで話す言い方になる。実存主義は、「自分にとって意味があるならば善」という考え方。それがたとえ役に立たなくてもかまわないところがプラグマティズムとは異なる。吉田松陰の最期の言葉、「かくすれば、かくなることと知りながら、やむにやまれぬ大和魂」はプラグマティズムからすれば、ばからしいということになる。論理実証主義は「論理性と事実に基づくことが善である」と考える。ノイローゼ患者を診て、「なぜ、論理性もなく、事実でもないのに悩んでいるのか」という考え方をとる。

\*つまり、「哲学を持つ」とは、

- ・この世に究極に存在しているのは何か？
- ・「知る、わかる」とはどういうことか？
- ・何が善で、何が悪か？

というようなことに関して、自分なりの答え、考えを持つということである。哲学を持つには、複数の哲学に触れ、その中から選ぶか、新しく創ればいい。

< 参考・引用 >

- ・山田英世（1966）, J・デューイ 人と思想23, 清水書院
- ・國分康孝（2000）, 「学校カウンセリングの哲学」, 岩手大学大学院学校カウンセリング特論講義記録